

## ジョージア（グルジア）便り その44

## 『チャイコフスキーを踊る』

文 高野陽年 text by Yonen Takano

チャイコフスキーの名曲を集めたアルバムには必ず彼のバレエ音楽がリストアップされる。同時に普通の感覚でバレエを思い浮かべるとチャイコフスキーの曲が頭に浮かび上がるだろう。「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」の曲は三大バレエ曲といわれ、舞台を目にしたことがなくても音楽をどこかで聴いたことはあるだろう。まだまだ若手と世間から目される僕でも、これらの三大バレエ曲はそれぞれの曲を群舞から主役まで計百回以上踊ってきた。一つの公演に最低でも一週間は練習し、一日のうちに何度も繰り返し返すわけであるから、同じチャイコフスキーの曲を何千回も聴いてきたことになる。いくら名曲でも何千回も聴けば飽き飽きするだろう。正直言って七日間公演の七日目などは音楽を聴くと悪酔いしたような気分になることがある。しかし何だろう、チャイコフスキーをしばらく聴かないと寂しく、物足りなさを感じる。いざ新たに練習が再開するとその旋律の美しさに感服するのだ。ダンサーとチャイコフスキーは切っても切り離せない関係なのかも

しれない。それはまるで長年連れ添ってきた夫婦のようだ。（僕は独身で憶測での発言。笑）

その他のバレエ音楽とも、同様に良好関係にあるかと言えはそうでもない。古典バレエの代表「バヤテール」や「ドン・キホーテ」などはミンクスという作曲家の作品であるのだが、お世辞にも良い音楽とは思わない。あまりに大衆的でつまらなさを感じてしまうのだ。チャイコフスキーの音楽に比べてテンポは取りやすいかもしれないが、音楽に乗ることが気持ちの面からも難しいのだ。

ダンサーにとって音楽に乗るとは何だろう。自分の体をもう一つの楽器のようにオーケストラの奏でる音楽に合わせるのだ。音に合わせるのではなくハーモニを奏でるのだ。それが良い楽譜であれば、お互いの個性を消すことなく、より一体感を感じることができる。

僕はこれまでに三大バレエ曲以外にも「弦楽セレナーデ」「モーツァルティアーナ」というチャイコフスキーの音楽を踊ってきた。両者ともジョージア

に縁を持つバランシンという振付けによるものである。バランシンのバレエはストーリーがあるわけではない。音楽を視覚化する振付けと評される天才である。チャイコフスキー、振付け、ダンサーが三位一体となった時この上ない爽快感と喜びを味わえるのが僕がこれらの作品を愛する理由である。

ジョージアでは新しい演出による「眠れる森の美女」を製作中である。実はチャイコフスキーはこの「眠れる森の美女」をロシア帝室劇場から発注されたのち、ここジョージアで仕事に取り掛かったと言われる説もある。

町には「眠れる森の美女」のアイデアが溢れているかもしれない。彼の息吹を感じよう。

## Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

